

淑徳生の制服

学園理事長 小林素文

明治時代38年（1905年）に開校された時の淑徳生は、日本髪を束髪にし、羽織に淑徳を示す二本線がある袴を着ていました（写真1）。当時の日常生活は着物中心でしたが、女学校に体育が取り入れられると、裾の乱れを心配することなく動き回れる羽織・袴姿が女学生の制服となつてゆき、淑徳もそれに倣つたものでした。

女学生にとつても、袴には宮中を連想させる高貴なイメージがあり、好感を持たれていました。そして、竹久夢



写真1

二の絵にあるように、下駄ではなく靴を履き、紙にリボンをしてテニスをするなど、「和」に「洋」を交えてオシャレを楽しむ生徒もいました（写真2）。

大正時代になると、「洋服細民（サラリーマン）は洋服を着て体裁を整えてはいるが安月給」ということが流行したように、洋服が一般に広がり始めました。そうした時代の流れは女学生の制服にも及び、大正9年（1920年）4月、京都の平安高等女学校が全国で初めてセーラー服の制服を採用したところ、その洒落た斬新さから、この制服



写真2

竹久夢二・画『新少女』秋期特別号「テニス」（『新少女』第1巻第7号表紙）1915年10月 竹久夢二美術館蔵



写真3
大正9年

モンペ姿で勤労奉仕に明け暮れた戦時下を経て（写真4）、戦後しばらくの間は物不足のため、手に入りやすい公立高校と同じデザインの制服を着用していましたが、物資不足がようやく解消されるようになった1954年、現在の制服の原型となるデザインの制服が制定されました（写真5）。

*

にあこがれて志願する者が続出しました。
平安高等女学校がセーラー服を採用したのと同じ、1920年5月、愛知淑徳も愛知県で初めて制服を羽織・袴から洋服に切り替えました（写真3）。しかし、この試みは生徒や父兄からの評判が悪いただけでなく、翌年の生徒募集にも影響がでました。当時の校長小林清作先生は「本校の洋服は地質において、または染色においても失敗であった」と認め父兄・生徒に謝する一方で「汽車が一回脱線したからといって、汽車がダメだということではできない」と洋装化を推し進めていきました。

平安高等女学校とは異なり、当初の評判は良くなかったものの、羽織・袴時代から受け継がれた淑徳生の澁澂と生き生きと運動に勉学に励む姿が評判を呼び、高等女学校時代の愛知淑徳の隆盛を支えていきました。



写真4
戦時下



写真5
昭和29年～昭和36年



写真6
昭和34年～現在

池下学舎から星ヶ丘学舎に移転した2年後の1961年、真新しい学舎にふさわしいイメージへと制服が改良されました。そのイメージは「淑徳晴れ」「天の深みへ夢掲げて、淑徳生よ、生き生きと深淵とあってくれ」との願いを込め、冬服は濃紺から空色の青白色（写真6）、夏服も襟カバリーを濃紺のサージから空色の淡水色となりました。

好評となったこの制服のイメージから、青がスクールカラーとなり今日に至っています。

*

掲載写真の淑徳生の制服は、学園創立60周年の折、本校の教員・同窓生・在学生が一致協力して、精密な調査を行い、手作りで複製した、心意気あふれる作品であり、こうした愛校心の積み重ねが今の淑徳の校風を醸し出しているのだと、心より感謝いたします。

